

「語る」力を育てるために

青 嶋 由美子

I. はじめに

幼稚園教諭や保育士、保育教諭を目指す学生には、「語る」力が必要不可欠である。将来就職した際には、子ども達に語り掛けたり物語ったりし、保護者には伝え、共に働く仲間と語り合わねばならない。「語る」力の基盤となるのは、豊かな語彙、正しい言葉、発声技術、子どもの言葉の発達段階への理解である。しかし昨今、TwitterやLINE等、短文で意見表明したり意思疎通を図ろうとしたりするコミュニケーション・ツールの多用により、多くの学生は、細かな感情を訴え、相手を不快にさせない言葉を習得する機会を持たなくなっている。またこのようなツールで単純なやり取りを重ねるため、妙な省略語を多用し、複雑な心情を述べたがらない。さらに、年々減少する読書量¹⁾や新聞購読時間の減少²⁾から、自らの使用語彙を増やす機会が減り、事物を言い表したり感情を伝えたりするための語彙も少なくなっており、子ども達に語り掛ける時に使用する語彙は限られたものになっている。幼児の身近にいる保育者をはじめとする大人は、子どもの言葉に大きな影響力を持っている。子ども達は、実に多くの言葉を耳にして成長している。

Further, we must remember that the child has far more abundant opportunities of hearing his mother-tongue than one gets, as a rule, with any language one learns later. He hears it from morning to night, and, be it noted, in its genuine shape, with the right punctuation, right intonation, right use of words and right syntax: the language come to him as a fresh, ever-bubbling spring.

1) 第62回学校読書調査の結果から、2007年～2016年の10年間、高校生の5月一か月間の平均読書冊数の推移を見てみると、2016年は1.4冊で最低となっている。また、不読者（0冊回答者）は、57.1%であり、こちらも過去10年間の最多となっている。

公益社団法人全国学校図書館協議会ホームページ 「第62回学校読書調査」の結果
<http://www.j-sla.or.jp/material/research/54-1.html>
アクセス日 2017年1月1日。

2) 「2015年国民生活時間調査報告書」で新聞（電子版を含む）の行為者率を男女年齢別にみると、男子10代では、1995年に14パーセントだったものが、2000年8%、2005年7%、2010年7%、2015年4%と減少している。女子10代の場合は、1995年13%、2000年9%、2005年7%、2010年4%、2015年3%となっている。

http://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20160217_1.pdf
アクセス日 2017年1月1日。

さらに、一般的に、人は、人が後に学ぶどのような言語であっても、習得するよりもはるかに大量の母国語を耳にする機会を子どもが有していることを、我々は思い出さなければならない。子どもは、注目すべきことであるが、間違いのない句読点、正しいイントネーション、語の適切な使用と正確な構文を伴った本物の形で、朝から晩まで母国語を耳にしている。言語は、真新しく湧き上がり続ける泉として子どものもとへやってくるのである。(訳・筆者)³⁾

イエスベルセンが述べているように、子どもは多くの言葉を耳にする。その言葉を模倣し、応用させていくことでその言葉の世界を拡大していくのである。子どもが言葉を習得する発達段階の一つが、かつて模倣期と呼ばれていたのも当然のことである。語彙が乏しく僅かな言葉を繰り返し用いるだけの大人と日常的に接している子どもが、どのような言語を獲得していくかという点には大きな懸念が存在する。

また、学生たちの言葉については、単に語彙数の問題だけではなく、話し方そのものの問題も存在する。近年、保育者を目指して本学に進学してくる学生の中に、出せる声が小さい・口の開き方が小さい・声が通らない・伝えたい相手を見て話さない・下を見て話すといった問題を抱える者が少なくない。そして、これは本学の学生だけに起きている問題ではない。

職業柄、わたしは学生たちと話をする機会が多いのですが、最近とみに、ことばの表現力のとぼしい学生がふえているのを感じます。第一にまず、発音不明瞭が目立ちます。ほとんど口を開かず、小声でぼそぼそつぶやくだけ。少子化の傾向が、発声の仕方にまで影響しているのでしょうか。……一人っ子か二人っ子、きょうだいの数が極端に少ないなかで、大事に大事に育てられてきた世代ですから、はっきりとものを言わなくても、以心伝心、母親の方で勝手に判断(=同時通訳?)してくれます。家庭内での言語訓練を欠いたまま、内から外に踏みだしてはいたものの、公私のケジメがついていない。⁴⁾

本学でもこのように明瞭で明確な話し方の出来ない学生が増加しているため、絵本の読み聞かせ、紙芝居やペープサート等の劇、素話やストーリー・テリング等の語り聞かせといった児童文化財を表現していく力の未発達が目立つ。

そもそも保育者や保育者を志す学生にとって必要とされる発声行為には、どのような点が要求されるのであろうか。「デンマークの言語学者イエスブルセン (Jespersen, J.) は、言葉の三つの水準として『他人が理解できる言葉』『正しい言葉』『明瞭で美しいよい言葉』を挙げている」という。⁵⁾ 子どもによる模倣が必然的に行われるため、模倣に値する言葉の

3) Jespersen, Otto: Language: its nature, development and origin (1922), G. Allen & Unwin, Ltd., 142頁 (California Digital Library, <https://archive.org/details/languageitsnatur00jespiala>, アクセス日2016年12月12日)

4) 川島隆太・安達忠夫著『脳と音読』講談社、2004年、98頁。

5) 岡田明編『改訂 子どもと言葉』萌文書林、初版1990年、改訂第7刷2004年、7頁に記載があるが、引用元・出典について言及がなく、原典未詳である。

水準が要求されているのであろう。また、発声と発音については、1) 充実した誠意ある態度で・2) 音量を豊かにする・3) 柔らかな発声を・4) 声の高さの調節をする・5) 正確に明瞭に発音する⁶⁾としているものもある。さらに、話し方と聞かせ方のまとめとして以下のような記述が見られる。

- 1) 明瞭な発音で。
- 2) ゆっくりとした速度で。
- 3) ほどよいポーズを。
- 4) 幼児にわかる、やさしいことばで。
- 5) 口ぐせのことばに注意する。
- 6) 短い文でリズムカルに。
- 7) 動機づけにくふうを。
- 8) 自然な態度・ゼスチュアで、表情豊かに。
- 9) 幼児からよく見える位置で。
- 10) 熱意をもって。⁷⁾

子ども達の前に立つ仕事を希望する学生にとって必要となるのは、子どもの模倣という洗礼に耐えうるだけの美しく豊かな語彙と、その語彙を伝達するための「語り」を形作れる発声である。この二要素に、子どもの言葉の発達段階への理解が加わって「語る」力は発揮されうるのである。

本学では、入学時から2年次春学期までの1年半にわたって、「語る」力を育成するためのプログラムを実施している。「語り」とは「内容を臨場感溢れる表現で伝え、聴き手の印象に残すことが目的」⁸⁾で行われるものであり、「喜怒哀楽の人間情緒を盛り込み、緩急をつけて聴き手のイマジネーションに訴え」⁹⁾るものである。そして「声だけを使って聴き手を物語の中に惹き込む高度な技術が凝縮され」¹⁰⁾、自分の世界観を言葉で紡ぎだせる力に発展するものである。自分の思いを表現することが苦手であり、自分の感情を極力表に出さないようにして人間関係を築きながら成長してきた世代には、ハードルが高い内容だと推察される。しかし、何よりも子どもが言葉を獲得していく現場に立ち会うことを生業として選ぶ以上、「語る」力は是非とも身に付けるべき技術でもある。

本学でのプログラムのあらましを述べておく。

1年次春学期においては、音読・朗読に重点を置いている。まず声に出して文章を読むこ

6) 中川正文・村石昭三・高杉自子編著『言語実技編』東京書籍、改訂第1版1985年、第5刷1988年、7頁。

7) 同書、15頁。また大久保愛氏は著書『幼児のことばと知恵』（あゆみ出版、初版1975年、第7刷1980年）の中で、幼稚園教師の話し方として注意すべき点として（1）話すことの内容を蓄積して、正確に話す（2）わかりやすく話す（①幼児に理解できる語と文で②発音を明瞭に③方言音はなおそう④ゆっくりと順序を追って）（3）ユーモアや比喩を使って楽しく（4）聞き上手は話し上手の4点を挙げている（204頁～208頁）。

8) 日本語朗読研究会HP「声で奏でる名場面」

<http://rodoku.jimdo.com/朗読とは/>

アクセス日2016年10月20日。

9) 同上。

10) 同上。

と（音読）から始め、朗読の基礎技術を身に付けられるような訓練を行っている。「耳だけで楽しむ文学」としての朗読を行うためには、発声方法・呼吸・読む速さ・間合いの取り方・台詞の読み分けの調節が出来なければならない。朗読は、誰が聴いても理解出来るような読み方が必要となる。そのためには十分な下読みと内容の理解が欠かせない。このような点を学生に理解してもらい、朗読を行うための技術を身に付けるため、現在は児童文学作品の朗読を授業に取り入れている。また、この時期には、「話す」力を確認するための講義も行っている。流行語や省略語、ら抜き言葉・い抜き言葉、人を貶める言葉等の問題点を知り、標準的で規範的な日本語の様相を理解するための講義である。「語る」ためには、その土台となる「話す」ための正しい力が築かれていなければならない。

1年次秋学期には、「語る」力を育てるための実践として、全員が2分間スピーチを行っている。この課題は、暗記で行い、スピーチの条件として、以下の5点を学生達に示している。

- ①題材は、自分で決める。幼児にふさわしい題材を選ぶ（例）行事の説明・ペット・自然・キャラクター等。既にやった人と題材が重ならないように配慮すること。
- ②聞き手は、幼稚園児・保育園児（3～5歳児）を設定すること。どの年齢を対象にするのかは、各自で決定して良い。
- ③目的は、子どもが知らないことを伝え、未知の物事に対する探究心・好奇心を育てることである。
- ④実施日・実施順は、抽選により決定する。
- ⑤スピーチの長さは、約2分程度（1分50秒～2分10秒）とし、短すぎたり長すぎたりしないようにする。

また、このスピーチは、相互評価を行うこととしている。評価の観点としては、以下の6点を示している。

- ①題材 聞き手のことを考えふさわしい題材を選んでいるか
- ②言葉 分かりやすい言葉を使っているか
 だらだらとした話し方ではなく、簡潔な文で述べているか
 対象年齢に相応しい言葉のレベルで話しているか
 園の中で用いるのに不適切な言葉を使っていないか
- ③声 大きさ、発音は良いか
- ④スピーチの長さ 約2分間
 短すぎないか、長すぎないか
- ⑤態度 真剣に取り組んでいるか
 目の前の子どもに語りかけるように話しているか
- ⑥覚え方 内容をきちんと頭に入れてスピーチしているか

人前で一つのテーマを暗記してきちんと話すという作業は、学生にとって精神的に大きな負担となっていることは明らかだったが、このステップを超えることが「語る」自信に繋がっていく。そして、さらに子どもの知識欲を刺激するような力強い語りを目指す基盤とも

なる。

2年春学期は、「語り」の集大成として、学生1人が10分間のスピーチを行う。学生は、七十二侯¹¹⁾の中から、くじにより担当すべき二つの侯が割り当てられる。それぞれの侯について、白井明大著『日本の七十二侯を楽しむ—旧暦のある暮らし—』¹²⁾を参考に、侯のことば・旬の草花・旬の味覚・旬の野菜・旬の魚介・旬の果物・旬の野鳥・旬の虫・旬の木・旬の兆し・旬の行事・旬の日といった項目から一つを選び、それについて調べ、年少児～年長児を設定して、その言葉の発達のレベルに合った言葉を用いて語るのである。自分で調べたことを纏め、子どもが理解出来る言葉に言い換え、補いきれない部分を伝えるために視覚に訴える素材を準備して、総合的な「語り」を講義室の中、披露してもらっている。

以上のようなステップで「語る」力の育成を目指しているが、次章以降では、その実践過程の詳細について述べていく。

II. 音読, 黙読, そして朗読

人間の読書段階の発達は、まず音読し、その後読書段階のステップアップと共に黙読に移行する。読書レディネス期（5歳～6歳半）では「絵本を見てそら読みをする」から始まり、独立読書開始期（1年2学期ごろ）には拾い読みや唇読を、そして、基礎読書力成熟期（2年の半ばから3年の終わりごろまで）では黙読も上達する¹³⁾とされている。このような発達段階を知れば、人間は年齢が高くなるにつれ、音読の技術の上に黙読の力が付け加えられていくと考えがちである。しかし、本学の学生は、実際にはそのような発達段階を経していなかった。教科書を音読することさえおぼつかない学生が少なからず居るのが現実である。使用されている漢字が読めないという場合もあるが、言葉の意味が分からず読み間違えたり、前後の文脈を理解せずに読んでいて自分がどのような内容の文章を読んでいるのか途中で戸惑ったりする者も多くなった。平仮名が続く個所で詰まってしまう者さえ居る。同僚の教員達からの「教科書さえともに読めない学生が年々増えている」という声も時を追うごとに高まっている。小学校入学時から、時には園児の時期から行われる音読であるが、なぜスムーズな音読が出来なくなってしまうのであろうか。

音読とは、目で文字を追い、それを口で音声にする行為である。一見単純な行為のように

11) 七十二侯とは、二十四節気各節気を五日ずつ初侯・次侯・末侯の三つずつに分けたものである。二十四節気の最初の節気は立春のため、最初の侯は2月に始まる。

1 東風解凍	10 雀始巢	19 蛙始鳴	28 乃東枯	37 涼風至	46 雷乃収声	55 山茶始開	64 乃東生
2 黄鶯睨院	11 桜始開	20 蚯蚓出	29 菖蒲華	38 寒蟬鳴	47 蟄虫坏戸	56 地始凍	65 麋角解
3 魚上氷	12 雷乃発声	21 竹笋生	30 半夏生	39 蒙霧升降	48 水始涸	57 金盞香	66 雪下出麦
4 土脉潤起	13 玄鳥至	22 蚕起食桑	31 温風至	40 綿柎開	49 鴻雁来	58 虹蔵不見	67 芹乃榮
5 霞始韃	14 鴻雁北	23 紅花榮	32 蓮始開	41 天地始肅	50 菊花開	59 朔風払葉	68 水泉動
6 草木萌動	15 虹始見	24 麦秋至	33 鷹乃学習	42 禾乃登	51 蟋蟀在戸	60 橘始黄	69 雉始雊
7 蟄虫啓戸	16 農始生	25 螳螂生	34 桐始結花	43 草露白	52 霜始降	61 閉塞成冬	70 款冬華
8 桃始笑	17 霜止出苗	26 腐草為螢	35 土潤溽暑	44 鶉始鳴	53 雉始雊	62 熊蟄穴	71 水沢腹堅
9 菜虫化蝶	18 牡丹華	27 梅子黄	36 大雨時行	45 玄鳥去	54 楓葉黄	63 鱖魚群	72 鷄始乳

12) 白井明大『日本の七十二侯を楽しむ—旧暦のある暮らし—』東邦出版、2012年初版、2013年第8版第3刷。

13) 高木和子氏が阪本一郎による読書脳力の発達段階の概略を示したものより引用。阪本一郎編著『現代の読書心理学』金子書房、1970年初版、1976年4版、96～97頁。

思われるが、脳内での動きを見ると、実はかなり複雑な行動であることが分かる。

音読は文字のことは目で見て、脳で情報処理を行い、音のことにばに変換して口から出力し、さらに自分の声が耳から入力されます。

すなわち音読は、音のことは、文字のことの双方を用いる、きわめて高度な活動なのです。脳の入力も文字、音双方ありますし、音の出力もあります。黙読よりも、脳をたくさん使うのは当たり前のことなのです。¹⁴⁾

このように複雑な音読という作業は、学齢が上がると共に、学校では重点を置かれなくなっていく。教科書の音読は行われるが、音読そのものの質を重視したやり方ではなくなる。かくして音読技術のレベルの低い者が増加してくるのである。子ども達への発声・発話が中心となる仕事に就く者としては、見過ごせない事態と言える。

①最初の取り組み

「音読」を授業に取り入れたのは、2010年からである。使用したテキストは、山下柚実著『年中行事を五感で味わう』（岩波ジュニア新書）¹⁵⁾であった。この年、音読のための技術として学生に要求したのは、「大きな声ではっきりと読む」「講義室のどこに居る人でも聞こえる大きさの声で読む」という2点のみである。このテキストで音読は、耳で楽しめる読み方というよりも、むしろ、学生に不足しがちな日本文化への知識・語彙を増やすという点が目的となっていた。知識や語彙が無ければ、自信を持った読み方は出来ないし、人に何かを伝えようとする「語り」に至ることは難しい。さらに、子どもに「語る」ための題材としての年中行事に関する知識を確認してもらいたいという思いもあった。

この年には、学生が年中行事について実際にどの程度の知識を持っているか、どのような点に興味を持つかを調査した。子どもに伝承事項としての年中行事を「語る」ために十分な知識を有しているかどうかを知りたいからであった。調査結果については、日本保育学会第64回大会（2011年5月21日）「保育系学生と年中行事」にて発表したものに加筆している。調査をして分かったことは、年中行事を意識してこなかった学生の多さと、感じ方・興味の持ち方の幅の狭さである。自由記述欄からは、子どもと関わる仕事をする上で必要な瑞々しく豊かな感性が育っていない点が浮き彫りとなった。この調査が契機となり、学生が持つ季節に関わる語彙の少なさが明確になり、2年次の「語り」のテーマを七十二候とするに至った。

この調査の結果の概要は以下の通りである。

14) 川島隆太・安達忠夫著『脳と音読』講談社、2004年、158～159頁。

15) 山下柚実『年中行事を五感で味わう』岩波書店（岩波ジュニア新書）、2009年。第一章新春（若水と雑煮・書き初め・七草粥・どんと焼き）、第二章春（花祭り・焙烙割り・端午の節句・お戒壇巡りとお砂踏み）、第三章夏（氷の節句、氷の朔日・夏越しの祓・山開き・朝顔市・土用のウナギ・六道まいり・花火と灯籠流し）、第四章秋（虫ききと放生会・重陽の節句・月見・大数珠繰り・べったら市と恵比寿講・お練り供養）、第五章冬（西の市・冬至・除夜の鐘）という内容である。アンケート調査では数を絞ってあるが、講義中には「お練り供養」以外は全て輪読している。

A. 調査方法

2010年度豊橋創造大学短期大学部幼児教育・保育科1年生96名を対象に、記名方式でアンケート調査を行った。

・実施日及び調査項目は以下の通りである。

- ①2010年4月12日「花祭り」
- ②2010年4月19日「端午の節句」
- ③2010年5月10日「氷の朔日・氷の節句」「夏越の祓」
- ④2010年6月7日「重陽の節句」「月見」
- ⑤2010年6月28日「冬至」「除夜の鐘」
- ⑥2010年7月19日「若水」「書き初め」

・授業の際に、山下柚実著『年中行事を五感で味わう』を輪読し、該当する年中行事について確認したり知見を得たりし、その後でアンケートを実施した。アンケート内容は、「はい」「いいえ」で回答するもの、選択肢から複数回答出来るもの、自由に記述するもので構成した。

B. 調査結果

1) 「花祭り」（『年中行事を五感で味わう』50～54頁）

第1回目に実施したアンケートは「花祭り」についてである。「花祭り」（灌仏会）は仏教系の保育園・幼稚園には欠かせない行事であり、稚児行列や花御堂、甘茶掛けを含め、保育者を目指す学生にとっては是非とも知っておいて欲しい内容である。そのため、調査の項目とした。

この回は、最後の項目である感想のみが自由記述であり、それ以外は、「はい」「いいえ」の二者択一とした。

第一の質問は「『花祭り』という行事があることを知っていましたか」といもので、「はい」33.7%という結果を得た。

第二の質問は「『花祭り』を体験したことがありますか」とし、「はい」5.4%、「はい」と回答した学生のうち、仏教系の幼稚園・保育園出身者は60%であった。

3番目の質問は、「天上天下唯我独尊という言葉を知っていましたか」であり、「はい」33.7%となった。

4番目の質問は「甘茶を飲んだことがありますか」といもので、「はい」7.6%となっている。

最後の自由記述については、どの回も同様であったのだが、様々な感想が記されている。主なものとして、

- ・砂糖の200倍も甘いという天然甘味料で作られる甘茶を飲んでみたい 51.1%
- ・花祭りという行事があるのだと初めて知った 34.8%
- ・花祭りを行う4月8日がお釈迦様の誕生日だとは知らなかった 18.5%
- ・花祭りという行事を体験してみたい 13.0%

- ・甘茶には無病息災のご利益があると知った 12.0%
- ・甘茶というものを初めて知った 12.0%
- ・甘茶は昔、万能の液体であったと知った 10.9%
- ・甘茶の甘味成分であるフィルズロチンが砂糖の200倍もの甘さだと知って驚いた 7.6%
- ・「天上天下唯我独尊」という語句への興味が湧いた 7.6%
- ・甘茶は疳の虫封じやトイレの虫除けにも使われるという不思議な飲み物だと知った 5.4%
などがあった。

2) 「端午の節句」(『年中行事を五感で味わう』61～67頁)

この調査では、五節句のうち二つを取り扱ったが、その一つが「端午の節句」である。現代では、「こどもの日」として扱われることが多くなったが、原型である「端午の節句」としての理解がどの程度あるのか、また、こどもの日の飾りつけや柏餅・粽といった行事食との関連を知っているのかという点を中心に調査した。「端午の節句」は幼児にも深く関わりのある行事であり、この折に得た知識を子ども達に語って欲しい題材として選択した。

第一の質問は「『端午の節句』に関連する何かを体験したことがありますか」というもので、「はい」87.5%という結果を得た。非常に高い数値であったものの、この行事ですら100%ではなかった。

2番目の質問からは、最初の質問に「はい」と答えた者にのみ回答をしてもらった。また2番・3番・4番については複数回答を可とした。

第二の質問は「『端午の節句』を体験した場所はどこですか」というものである。選択肢毎に①自宅 64.3%、②保育園・幼稚園 64.3%、③その他 3.6%となった。

3番目の質問は、「体験した『端午の節句』で飾ってあったものを選んでください」とし、選択肢毎に①鯉のぼり 86.9%、②鎧・兜 47.6%、③武者人形 9.5%、④金太郎 2.4%、⑤天神様 7.1%である。

4番目の質問は「体験した『端午の節句』で食べたことがあるものを選んでください」というもので、選択肢は①柏餅 83.3%、②粽 8.6%、③鯉のあらい・④鯉こくについては0%だった。

第五の質問は「菖蒲湯に入ったことがありますか」で、「はい」は27.4%であった。

最後に自由記述欄を設け、「『端午の節句』を読んだ感想」を書いてもらった。主なものとして

- ・「端午の節句」の本来の意味を理解した 18.8%
- ・菖蒲湯に入ってみたい 14.6%
- ・粽を食べてみたい 13.5%
- ・自分が知っている以外にも「端午の節句」に関わる食物や行為があると知った 7.3%
- ・鯉のぼり、柏餅、粽が「端午の節句」と繋がっているとは知らなかった 5.2%

などがある。自分が知っていた「こどもの日」に新たな知識を加えられたと感じる学生が目立つ自由記述であった。

3) 「氷の朔日・氷の節句」「夏越の祓」(『年中行事を五感で味わう』80～89頁)

「五節句」とは異なり、恐らくは一般的には知られていないだろうと思われる年中行事を敢えて調査してみた。6月は、虫歯予防デーや時の記念日といった行事が一般的であるが、このように珍しい知識を身に付けていれば、子ども達にとって未知の行事を語り伝えられる保育者となることが出来るのではないかと考えたためである。

今回のアンケートは、最後の自由記述欄を除いて、「はい」「いいえ」の二者択一で実施した。

第一の質問は、「『氷の朔日』『氷の節句』という言葉を知っていましたか」というもので、「はい」は僅かに4.8%であった。

第二の質問は「『水無月』という和菓子を知っていましたか、また、食べたことがありますか」というもので、「知っていた」は13.1%、「食べたことがある」は4.8%であった。

3番目の質問は、「『夏越の祓』という言葉を知っていましたか」であり、「はい」は3.6%、4番目は「『茅の輪くぐり』を経験したことがありますか」で「はい」は4.8%であった。

今回の「氷の朔日・氷の節句」「夏越の祓」は、学生にとってとにかく馴染みのない行事だったようである。感想の内容は実に多岐にわたり、本筋の行事の説明から派生した「撫でる」「触れる」といった行為の意味に関するものが散見された。主なものとしては、

- ・人が「撫でる」「触れる」行為の意味が分かった 13.1%
- ・人形（ひとがた）を流す行事があると知っていた 12.0%
- ・茅の輪くぐりをしてみたい 9.5%
- ・人形（ひとがた）の紙を用いて祓いを行ったことを知らなかった 9.5%
- ・触れるとご利益のある「仏像」・「牛の像」に触れてみたい 7.1%
- ・人形に自分達の穢れを移すのは可哀想 7.1%
- ・「牛の像」「おびんずる様」等を撫でたことがある 7.1%
- ・「触れて痛みを取る」という行為の経験がある 6.0%
- ・「人形」を「ひとがた」と読む場合があると初めて知った 6.0%
- ・雛人形を流すことがあると知って驚いた 6.0%

等である。また、ごく少数ではあるものの「水無月という語の由来が分かって良かった」「こういった伝統行事に対する興味が湧いた」「大晦日に人形（ひとがた）を使った祓いを行っている。この夏越の祓と関連があるのだろうか」という感想が見られた。

4) 「重陽の節句」「月見」（『年中行事を五感で味わう』124～136頁）

「重陽の節句」は別名を菊の節句とも言い、五節句の一つである。しかし、近年では人日の節句と共に知らない人が増加している節句である。この「重陽の節句」についても、知らないことを知るという目的で取り扱った。また「月見」は人口に膾炙した行事であるが、お供えするものについて確認して欲しいと考え、対象とした。

この回のアンケートは、「はい」「いいえ」の二者択一のもの、複数回答を可としたもの、自由記述で構成されている。

第一の質問は「『重陽の節句』という言葉を知っていましたか」で「はい」は12.1%であった。

第二の質問は「『重陽の節句に関連する以下の事柄で知っていたものを○で囲んで下さい』というもので、複数回答可であったが、①菊酒 2.2%、②菊花茶 2.2%、③菊枕・④菊水伝説・⑤着せ綿の三選択肢については誰も知らなかった。

第三の質問は「月見をしたことがありますか」であり、「はい」は37.4%であった。この質問に「はい」と回答した者だけに、複数回答可として時期とお供えしてあったものを尋ねた。時期については、8月5.9%、9月70.6%、10月26.5%となっており、片見月にならないように月見をした者が居ると推察出来る。また、そのときにお供えしてあったものは、①月見団子 91.2%、②栗 14.7%、③里芋 8.8%、④饅頭 5.9%、⑤梨 0%、⑥葡萄 2.9%、⑦薄 67.6%、⑧その他の植物 2.9%（具体名の記述無し）という結果である。

この回は「重陽の節句」に関しての感想を自由に記述してもらった。菊の花という身近な植物に関わる節句のためか、学生達はとっつき易かったようである。主な記述としては、

- ・菊花茶を飲んでみたい 38.5%
 - ・重陽の節句というものを初めて知った 27.5%
 - ・菊の花に対するイメージが変わった 15.4%
 - ・菊が長寿を祝うために用いられる植物だと初めて知った 7.7%
 - ・「九」が縁起の良い数だと初めて知った 7.7%
 - ・菊枕で眠ってみたい 6.6%
 - ・菊の効用の多さに驚いた 5.5%
 - ・重陽の節句を体験してみたい 5.5%
 - ・花を用いるお茶の種類が多さに驚いた 5.5%
- 等がある。

5) 「冬至」「除夜の鐘」（『年中行事を五感で味わう』156～166頁）

この回の調査の対象となった行事は、二つとも学生達がよく知っているであろうと予想されるものであった。「体験」を通して知っているのか、また、子ども達に語る事が出来るものとしての知識があるのかを知りたいと思い、選択した。

この回のアンケートも、「はい」「いいえ」の二者択一のもの、複数回答を可としたもの、自由記述で構成されている。

最初の質問は、二者択一で「『冬至』がどのような日であるか知っていましたか」で「はい」が61.5%であった。比較的高い数値ではあるものの、筆者の予想よりは遥かに低いものであった。

次の質問は、複数回答可とし、「『冬至』に関連する食物として認識していたものを全て選んでください。また、選択肢以外に認識していたものがあれば、（ ）内に記入して下さい」というものがあった。結果は①柚 53.4%、②蒟蒻 2.2%、③蓮根 1.1%、④大根 6.6%、選択肢以外のものとして南瓜 5.5%、冬瓜 1.1%であった。

第三の質問は、「『除夜の鐘』を昨年耳にしましたか」で二者択一、「はい」は33.0%であった。「はい」を選択した者についてのみ、聞いた場所を記入してもらったところ、「自宅のテレビで」33.3%、「近隣の寺で」20%、「豊川稲荷にて」10%、「近隣の神社で」

6.7%，「父母の実家にて」6.7%等であった。

自由記述の感想は「冬至」についてであったが、「除夜の鐘」について記した者が非常に多かった。「冬至」に関連するものとして、

- ・ 柚湯に入りたい 20.9%
- ・ 柚が冬至に関係するとは知らなかった 12.1%
- ・ 冬至には柚湯に入るという習慣を続けていきたい 9.9%
- ・ 柚湯に無病息災の効能があるとは知らなかった 8.8%
- ・ 柚湯のことを初めて知った 5.5%
- ・ 仏手柑の匂いをかいでみたい 5.5%
- ・ 柚を使って化粧水を作りたい 4.4%

等があった。

6) 「若水と雑煮」「書き初め」（『年中行事を五感で味わう』2～13頁）

今回の対象のうち、「若水」については知らない学生が多いのではないかと予想していたが、日本人と水の関係に目を向けてもらう機会になることを願って選択した。「雑煮」については、就学前の幼児とっても非常に身近な行事食であることから、「語る」ことの出来る知識を身に付けているかどうか確認をするために選んだ。最近では正月に餅を食べない家も増えていると聞き、保育者にとって、日本文化を伝えるための知識の重要性はより高まっている。「書き初め」については、小学校・中学校で冬休みの課題となっているから、全員が経験していると予想していた。

今回のアンケートは、二者択一のもの、複数回答可のもの、自由記述で表現と感想を問うものを組み合わせてみた。

まず、最初に、「『若水』という言葉を知っていましたか」と問うてみたところ、「はい」は6.0%であった。

次に、「あなたの家庭での雑煮はどのようなものですか」として、汁・餅・具材について複数回答可で尋ねてみた。汁については、①すまし汁 82.1%，②味噌仕立て 11.9%，③その他 3.6%であった。餅については、①四角 75%，②丸 22.6%となった。具材については、①青菜 46.4%，②人参 64.3%，③大根 57.1%，④里芋 32.1%，⑤鶏肉 44.0%，⑥魚介類 7.1%，⑦練り物 22.6%，⑧その他として白菜 38.1%，鰹節 8.3%，油揚げ 8.3%，椎茸 7.1%等が回答として挙げられた。

三番目には「書き初めを一月二日にした経験がありますか」という問いを出し、「はい」が14.3%となった。「書き初めをすべき日」を指定したために、予想よりも低い数字となった。

今回初めて、学生がどのように表現するかを知るために「墨を磨ったときの匂いを、あなたはどのように表現しますか」と尋ねてみた。学生の持つ感性の一端を知るためであった。ユニークな表現の仕方が数多く見られたが、ある程度数がまとまったものとしては、

- ・ 心が落ち着く匂い 9.5%
- ・ 独特な匂い 9.5%
- ・ ツーンとした匂い 8.3%

であった。

最後に、「若水と雑煮」を読んだ感想を自由に記してもらった。主なものは、

- ・若水と言う言葉を知らなかった 31.0%
- ・雑煮が地域によって異なることを知らなかった 30.0%
- ・他の地域の雑煮を食べてみたい 20.2%
- ・水の重要性を知った 12.0%
- ・地方によって雑煮が異なることを知っていた 10.7%
- ・味噌味の雑煮を食べてみたい 10.7%
- ・季節毎の麩の種類が多さに驚いた 8.3%
- ・雑煮を食べたくなった 7.1% (7月に実施したアンケートであったが)
- ・来年のお正月には若水を汲みたい 6.0%

等である。

この調査に回答した学生の中には、多くの年中行事を体験している者も居た。しかし、全体として見ると、年中行事に対する知見や関心は低いという結果であった。良く知られていると思われる「端午の節句」「月見」「冬至」でさえ、全員が体験したという意識を持っているわけではなかった。しかし、何かのきっかけを得ることが出来れば、興味を持ち体験してみたいと考える学生も存在した。学生達が、子ども達に日本の伝統行事や行事食に代表される文化を語り継承できる保育者に育つために必要なことが形として見えてきた。読んだり語ったりするためには、知識の蓄積が欠かせないという点である。

最初の取り組みは明らかに失敗であった。「音読する」という作業に、教員側からの余りに多くの要求を詰め込み過ぎたからである。学生にとっては馴染みの薄い年中行事、即ち十分な知識として身に付いていない内容について理解しながら(さらに新しい知見を身に付けることを要求されながら)、上手に音読(やがては朗読)するというのは、過重負担であった。この反省から、人前で読むための実践は、『年中行事を五感で味わう』といった知識を得るためのものから、実際に「聴いて楽しめる耳文学」へとテーマを変更することとなった。半期間という短い時間の中で、音読・朗読の技術を身に付けることと、「語る」ための語彙を増やすことを両立させることが非常に難しいと分かったからである。まずは、「語る」ための声の出し方の基本を学び、子どものための「語り」へと発展させる、そしてその「語り」の中に、子どもに様々な季節の移ろいを伝えるための語彙を増やしていくという方向性が固まったのであった。

②何を音読・朗読の対象とするか

張りのある声、豊かな声量で、生き生きと語るための基礎となる音読・朗読の素材として、学生にどのようなものを読んでもらえば良いのか。これについては、現在もまだ模索の段階にある。音読・朗読のための素材であると同時に、学生の知識に繋がるものを探している。学生の興味をひき、下読みを十分に行って上手に読みたいと思ってもらえるような素材は、なかなか見つからない。

2011年度は、大岡信著『おとぎ草子』¹⁶⁾を選んだ。お伽草紙は、現代の絵本に連なる重要な物語群である。近年、学生が読もうとしない日本昔話絵本の原話となっているものも多い。保育者を目指す学生が、素話やストーリー・テリングを行う際の題材ともなると考え、この本に決定した。収録7作品のうち授業で読んだのは、「一寸法師」「浦島太郎」「鉢かづき」「唐糸そうし」の4作である。「一寸法師」「浦島太郎」には馴染みがあるのか、比較的スムーズに音読出来た者が多かったが、それ以外の作品は、滑らかに読む者は少なく、物語として楽しめない様子であった。

2012年度には、マイケル・ポンド著『くまのパディントン』¹⁷⁾で朗読を行った。児童文学作品としての認知度が高い作品であること、文章がそれまでに読んだ作品よりも平易であり声に出して読みやすいと考えたことが選択の理由である。収録された八つの短編のうち、「どうぞこのクマのめんどろをみてやってください」「はじめてのおふる」「パディントン地下鉄に乗る」「百貨店での出来事」「パディントンと名画」の5作品を授業の中で読了した。学生が作品に対して抱いた親近感は大きかったが、平仮名が続く箇所が音読をする上での難所となることが多かった。なお、2016年度にもこの本を用いたが、朗読のスピードについて「ゆっくりめ」であることを学生に意識してもらったため、「百貨店の出来事」「パディントンと名画」の2作品は読む時間が無かった。同一の素材であっても、朗読のためのポイントを提示し続けることで、読了出来る量に大きな違いが出た。

2013年度には、安野光雅の素晴らしい挿絵で学生の興味を引くことを期待して、イタロ・カルヴィーノ再話『カナリア王子——イタリアのむかしばなし』¹⁸⁾を朗読の素材とした。異国情緒溢れる挿絵が彩る物語は、ごく僅かしか居ないものの小説好きの学生を夢中にさせた。その一方で初めて「話が全く理解出来ない」と訴えてくる学生も出た。朗読の上手さという観点からすると、予想以上の差を生じさせた本となった。実際に朗読出来たのは、収録7作品のうち、「カナリア王子」「とりごやの中の王子さま」「太陽のむすめ」「金のたまごをうむカニ」の4作品であった。

2014年度は、内田莉紗子編『ロシアの昔話』¹⁹⁾を選んでみた。本学の学生達は1年次に絵本を100冊読み、その記録をつけている。春学期50冊分の課題の中には10冊以上伝承絵本

- 16) 大岡信著『おとぎ草子』岩波書店（岩波少年文庫）、初版1995年、新版第2刷2006年。収録作品は、「一寸法師」「浦島太郎」「鉢かづき」「唐糸そうし」「梵天国」「呑香童子」「福富長者物語」の全7作である。
- 17) マイケル・ポンド作・松岡享子訳「文庫版 くまのパディントン パディントンの本1」福音館書店（福音館文庫）、初版2002年、第7刷2011年。収録作品は、「どうぞこのクマのめんどろをみてやってください」「はじめてのおふる」「パディントン地下鉄に乗る」「百貨店での出来事」「パディントンと名画」「パディントンの芝居見物」「海べでの冒険」「消えてなくなる手品」の全8作。2016年度に使用した版は、第9刷2014年のものである。
- 18) イタロ・カルヴィーノ再話・安藤美紀訳『カナリア王子——イタリアのむかしばなし』福音館書店（福音館文庫）、初版2008年、第2刷2010年。「カナリア王子」「とりごやの中の王子さま」「太陽のむすめ」「金のたまごをうむカニ」「ナシといっしょに売られた子」「サルスの宮殿」「リオンブルーノ」の全7作品収録。
- 19) 内田莉紗子編・訳『ロシアの昔話』福音館書店（福音館文庫）初版2002年、4刷2011年。収録作品は、「魔法の馬」「つるとおおさぎ」「うさぎのなみだ」「まぬけなおおかみ」「ババヤガーの白い鳥」「かえるの女王」「マーシャとくま」「空をとぶ船」「小鳥のこぼし」「かますのいっつけ」「白いかも」「イワン王子とはいいろいろおおかみ」「おおきなかぶ」「雪むすめ」「動物たちの冬ごもり」「ねこときつね」「魔法の指輪」「おんどりとたまめ」「金のとさかのおんどりと魔法のひきうす」「金の魚」「魔女と太陽の妹」「はいいろおでこやぎとひつじ」「魔法のシャツ」「銅の国、銀の国、金の国」「おおかみと子やぎたち」「海のマリア姫」「ねことおんどり」「海の王とかしこいワシリーサ」「牛の子イワン」「うそつきやぎ」「魔法をかけられた王女」「ふたりのイワン」「どこかしらんが、そこへ行け、なにかしらんが、それをもってこい!」の33編である。

(昔話絵本)を入れることになっているのだが、その中にロシアの昔話を題材とした絵本が「おおきなかぶ」以外はあまり登場してこない。原因は人名にカタカナが多用されていること、ページ数の多いことだと思われる。しかし、ロシア(スラブ系)の昔話はバーバ・ヤーガ(Баба-Яга)やコシチェイ(カスチェイ)(Кошэй, Koshchey), イワン王子やワシリーサといった登場人物、また、ロシアの厳しい気候を背景としている等特徴的であり、非常に魅力的なものが多いので、学生にも親んでもらいたいと願い、この本にしてみた。朗読したものは、「魔法の馬」「つるとおおさぎ」「うさぎのなみだ」「ババヤガーの白い鳥」「かえるの王女」「マーシャとくま」「空をとぶ船」「小鳥のことは」「かますのいいつけ」「おおきなかぶ」「雪むすめ」「金の魚」「魔法のシャツ」「おおかみと子やぎたち」の14作品である。

2015年度には、石井桃子編・訳『イギリスとアイルランドの昔話』²⁰⁾を題材とし、朗読を実践した。イギリス民話の代表的なものとしては「三びきの子ブタ」「ジャックと豆の木」が挙げられる。この2作品は共に多くの絵本となっている。しかし、内容については改変されているものが見られ、学生が、知っている昔話として語るのは改変されたストーリーが殆どである。昔話がどのような意図で変えられているのか、改変は本当に必要かという観点から絵本を選んで欲しいと思い、今回はイギリスとアイルランドの昔話を知る機会とした。また、特に「三びきの子ブタ」は手遊び歌やエプロン・シアターとして学生が回数多く演じるものである。昔話としての原型を知った上で演じてもらいたいと考えた。読了したものは、「三びきのクマの話」「かたやきパン」「三びきの子ブタ」「りこうなお嫁さん」「ジャックとマメの木」「姉いもと」「トム・ティット・トット」「ノロウェイの黒ウシ」「イグサのかさ」「白いマス(コングの昔話)」の10作品であった。今回は朗読の実践後に、絵本となっているものを紹介したため、実際に絵本で内容を確認する学生が散見された。子どもに語る際に、どれを脚本のベースに持ってくるかという選択の幅が広がったことと思う。

以上、2010年以降の実践の様子を概観してみたが、僅か半期の授業内で音読から朗読へと力を伸ばそうとすることの困難さを実感している。「『朗読』というのは『音読』の高度の概念である。音読では『正確さ』が主たる狙いとされるのに対して、朗読では『うまさ』『巧みさ』『美しさ』が主たる狙いとされる」²¹⁾という考え方に従えば、音読が満足に出来ない者には朗読は不可能であろう。朗読を行うためには、音読そのものから鍛えなおす必要がある。音読の際に、問題となる読み方として、野口芳宏氏は以下のものを挙げている。

- ・つかえ読み(スムーズに読み進めない)
- ・戻り読み(一度読んだところを又読む)

20) 石井桃子編・訳『イギリスとアイルランドの昔話』福音館書店(福音館文庫)、初版2002年、第7刷2013年。イギリスの昔話として「ちいちゃい、ちいちゃい」「チイチイネズミとチュウチュウネズミ」「三びきのクマの話」「かたやきパン」「三びきの子ブタ」「マッカどん」「おすだんなど、おすおくさん」「だんなも、だんなも、大だんなさま」「空の星」「ハドレイのべここ」「ふしぎな客」「りこうなお嫁さん」「ジャックとマメの木」「姉いもと」「スワファムの行商人」「トム・ティット・トット」「ものぐさジャック」「ノロウェイの黒ウシ」「妖精のぬりぐすり」「巨人たいじのジャック」「イグサのかさ」「ディック・ウイテントンとネコ」の22編、アイルランドの昔話として「元気な仕立て屋」「どろぼうの名人」「たまごのカラの酒づくり」「ノックグラフトンの昔話」「白いマス(コングの昔話)」「主人と家来」「大男フィン・マカウル」「グリーシ」の8編、計30編が収められている。

21) 野口芳宏著『教室音読で考える(上)』明治図書出版、初版1991年、再版1992年、156頁。

- ・早口読み（べらべらと早口で読む）
- ・とばし読み（文字をぬかして読む）
- ・作り読み（言葉を適当に作って読む）
- ・拾い読み（言葉として読めない）
- ・癖読み（妙な抑揚の癖をつけて読む）
- ・大げさ読み（オーバーで品のない読み方）
- ・くぐもり読み（口を開かないで読む）
- ・無表情読み（一本調子で文脈を無視する）
- ・符号無視読み（句読点などを無視して読む）
- ・大声読み、小声読み、などなど²²⁾

残念ながら、学生達の誰かに必ずどれかが当て嵌まっている。音読、そしてその上の段階である朗読を目指すためには、今までのように知識を得るという目的を兼ねた素材では難しいと判断すべきであろう。「声に出して読みたい」「読み聞かせ」といった言葉を冠した本が数多く出版されている今、そのような素材を利用する方向も検討すべき時期である。

〈続く〉

参考文献

- 秋田喜代美・中坪史典・砂上史子編著『保育内容 領域「言葉」』みらい、初版2009年、第2刷2012年。
 石井桃子編・訳『イギリスとアイルランドの昔話』福音館書店（福音館文庫）、初版2002年、第7刷2013年。
 内田莉沙子編・訳『ロシアの昔話』福音館書店（福音館文庫）初版2002年、4刷2011年。
 大岡信著『おとぎ草子』岩波書店（岩波少年文庫）、初版1995年、新版第2刷2006年。
 大久保愛著『幼児のことばと知恵』あゆみ出版、初版1975年、第7刷1980年。
 太田光洋編著『保育内容・言葉』同文書院、初版2006年、第2版6刷2014年。
 岡田明編『改訂 子どもと言葉』、萌文書林、初版1990年、改訂第7刷2004年
 カルヴィーノ、イタロ再話・安藤美紀夫訳『カナリア王子—イタリアのむかしばなし』福音館書店（福音館文庫）、初版2008年、第2刷2010年。
 川島隆太・安達忠夫著『脳と音読』講談社、2004年
 川原佐公・中西昇・芳賀純編著『言葉〈実技・実践編〉』三晃書房、初版1991年、6刷1999年。
 阪本一郎編著『現代の読書心理学』金子書房、1970年初版、1976年4版
 白井明大『日本の七十二侯を楽しむ—旧暦のある暮らし—』2012年初版、2013年第8版第3刷、東邦出版。
 戸田雅美編著『演習 保育内容 言葉』建帛社、2009年。
 中川正文・村石昭三・高杉自子編著『言語実技編』東京書籍、改訂第1版1985年、第5刷1988年。
 成田徹男『保育内容 ことば〔第2版〕』みらい、初版2008年、第2版第3刷2011年。
 野口芳宏著『教室音読で考える（上）』明治図書出版、初版1991年、再版1992年
 ボンド、マイケル作・松岡享子訳『文庫版 くまのパディントン パディントンの本1』福音館書店（福音館文庫）、初版2002年、第7刷2011年。
 無藤隆・高杉自子編『保育内容 言葉』ミネルヴァ書房、1990年。

22) 同書、175～176頁。

【Web情報】

- ・日本語朗読研究会HP「声で奏でる名場面」
<http://rodoku.jimdo.com/朗読とは/>
アクセス日2016年10月20日.
- ・Jespersen, Otto: Language; its nature, development and origin (1922) , G. Allen & Unwin, ltd. California Digital Library, <https://archive.org/details/languageitsnatur00jespiala>,
アクセス日2016年12月12日.
- ・公益社団法人全国学校図書館協議会ホームページ 「第62回学校読書調査」の結果
<http://www.j-sla.or.jp/material/research/54-1.html>
アクセス日 2017年1月1日.
- ・「2015年国民生活時間調査報告書」
http://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20160217_1.pdf
アクセス日 2017年1月1日.